

## 臨地実習前技能修得到達度評価に向けたアクティブラーニング導入の効果検証

◎蓮沼 裕也<sup>1)</sup>、清水 智美<sup>1)</sup>、大辻 希樹<sup>1)</sup>、濤川 唯<sup>1)</sup>、澤口 能一<sup>1)</sup>、小寺 洋<sup>1)</sup>  
桐蔭横浜大学<sup>1)</sup>

【背景・目的】 2022年度入学生より臨床検査技師養成施設では新カリキュラムが導入され、臨地実習前には1単位の技能修得到達度評価(以下、到達度評価)の実施が必須となった。本学は1月から2月を集中的アクティブラーニング(以下IAL)タームとしており、この期間を活用して到達度評価の効果的な実施を目指した。また、到達度評価のA項目は学内実習科目の実技試験と類似していたことから、発展として、IALタームに学生が主体的に到達度評価を達成するための試みを行なったので報告する。

【方法】 対象は2023年度臨地実習(4~7月)を履修する新4年次生で、前年度3月第2-4週に実施した。1週目は評価項目のマニュアル作成および報告会、2週目は実技練習期間とし、ジグソー方式によるグループワークを採用した。実技試験は、共通項目を評価に加えたA項目を実施した。(評価項目のマニュアル作成)各科目の担当グループ(4-7名)を編成し、それぞれの評価項目に対するマニュアル作成を行なった。各科目には担当教員が就き、適宜アドバイスをを行なった。(実技練習期間)上記の科目担当学生が1名

以上含まれるように4グループ(各7-8名)を編成し、学生自身が教え合う練習期間を設けた。(実技試験)受験者は2グループ(午前と午後)に分け、1日で行った。評価は3項目とし、2名並列でブースを設置して1教員が1学生の採点を担当し、試験室をローテーションするよう設計した。

【結果・考察】 到達度評価後のアンケートは臨地実習前後で、それぞれ21および23名から回答を得た。実技試験をやったよかったと「とても感じる」は、臨地実習前後でそれぞれ76.2%および56.5%だった。実技練習期間における自身の努力レベルは、各項目で50%以上が「満足」または「非常に満足」と回答された。臨地実習後に感じたアクティブラーニングの有用性は、全ての項目において90%以上が「役に立った」と回答された。一方で、求められているマニュアルを考案・作成する困難さや練習時間確保などについて、改善を求める回答を自由記述式で認めた。以上より、到達度評価に向けたアクティブラーニングを採用した方策は有用であるが、教員の中途介入の必要性などは改善すべきと考えられた。(Tel 045-972-5881(内線 2291))